

【研究会シリーズ2】

ジェームズ・ピーターソン氏を囲んでの研究会を終えて

森 あおい

2014年12月8日18時半から20時まで、明治学院大学横浜キャンパス851教室で、米国ペンシルベニア州リーハイ大学英文科准教授・同大学アフリカーナ研究所所長のジェームズ・ピーターソン（James Peterson）氏を迎えて研究会が開催され、学外からの参加者を含めて18名の出席があり、活発な意見交換が行われた。ピーターソン氏は、アフリカン・アメリカン文学・文化学会（African American Literature and Culture Society）の前会長を務めた、新進気鋭の若手研究者である。特に、アフリカン・アメリカンの伝統的文学・文化の系譜に沿ってヒップホップ¹に代表される現代の若者文化を読み解く研究で知られる。2014年には、『ヒップホップ地下鉄道とアフリカン・アメリカンの文化』（*The Hip-Hop Underground and African American Culture*, Mcmillan）を出版し、アフリカン・アメリカン文学とヒップホップ文化が交錯する地点で見られる地下鉄道²の多面的な解釈の可能性について、アフリカン・アメリカンの代表的作家であるリチャード・ライト³やラルフ・エリソン⁴、アミリ・バラカ⁵、音楽プロデューサーのKRSワン⁶、ジャズ・ピアニストのセロニアス・モンク⁷等を比較検討しながら分析している。また、アメリカの人種問題に関するコメンテーターとして、CNN, Fox News, CBS News, MSNBC, ABC News等のテレビ番組や、リベラル系のインターネットニュースとして知られる『ハフィントンポスト』等のメディアでも積極的に発言している。

今回の研究会では、“The Power of the Underground in African American Culture: Five Examples”（「アフリカン・アメリカンの文化における地下鉄道の力とその5つの例」）という演題でピーターソン氏にご講演いただいた。講演の要旨は以下の通りである。

地下鉄道の概念は、アフリカン・アメリカンの文化において様々な形で明確に現れている。本発表では、地下鉄道の概念が、いつの時代にどのようにして、アフリカン・アメリカンの生活、文学、社会運動、音楽、そして芸術において体現されているかを考察する。一つの例は、音楽や文学によって表現されている社会的・政治的な運動である奴隷解放のための「地下鉄道」の活動で、それはアメリカ合衆国形成における重要な時代を象徴している。地下鉄道は、19世紀のアメリカ人にとって自由の概念を明確にした抵抗運動であった。その後、この概念は、アメリカ文学における様々な場面で繰り返し登場する。たとえば、リチャード・ライトの『地下に住んだ男』、ラルフ・エリソンの『見えない人間』、アミリ・バラカの黒人演劇の古典とも言える『ダッチマン』にも現れている。そしてついには、地下鉄道の概念的な力は、ヒップホップ文化の初期の発展にも見出すことができる。ヒップホップ文化は、空間をめぐる闘いであり、人種に関する、また芸術上の正当性に対

する挑戦であり、市場経済の支配をめぐる問題でもある。そしてこれらの要素は、昨今の黒人若者文化と深く関わっている。

旧世界からの抑圧から解放された自由の概念は、アメリカの建国の理念を支えた一方で、アメリカから連行された奴隷、またその子孫たちを搾取し、排除することによって成立していた。ピーターソン氏は、その排除の歴史を踏まえた上で、アフリカン・アメリカンが自由を求めて闘った地下鉄道の組織に注目し、その活動がひいてはアメリカの民主主義の根幹にあった自由を希求する運動の系譜に連なることを示している。さらに、地下鉄道の活動を支えた概念が、変化しながらも黒人の音楽や文化を通して綿々と継承され、最近では、ヒップホップ文化にも影響を与えていると論じている。この 40 年間ほどの間に、ヒップホップ文化は、ニューヨークのブルックスというローカルな周縁化されたインナーシティの文化から変容し、グローバルな現象になってきていると指摘した上で、ピーターソン氏は、ヒップホップ文化を含めて、これまで排除されてきたアフリカン・アメリカンの文化が、人種、地域を超越した文化現象の源流にあることを明らかにしている。

今回のピーターソン氏の講演会が開催される約半月前の 11 月 24 日には、米国ミズーリ州ファーガソンで 2014 年 8 月 9 日に起きたアフリカン・アメリカンの青年マイケル・ブラウンの射殺事件で発砲した白人警官ダレン・ウィルソンを同州の大陪審は不起訴とした。ブラウンは、警官に呼び止められて言い合いになった際に、武器を持たず丸腰だったという目撃証言もあったことから、警察への抗議行動が始まり、全米で抗議集会が開かれた。ピーターソン氏は、来日前の 11 月 30 日には、CBS のニュース番組、“Face the Nation” でこの事件についてのコメントを求められ、アメリカの警察組織に存在する人種的偏見を指摘する一方で、希望を失わずに差別と闘う運動を続けることが必要だと述べている。民主主義を標榜するアメリカでいまだに根強く残る人種差別と対抗するために、ピーターソン氏が提唱するアフリカン・アメリカンの歴史・文化にルーツを持つヒップホップ文化の研究が、差異を超えたアメリカ社会を構築するための可能性を示唆していると言えるのではないだろうか。ピーターソン氏の今後の研究に期待したい。

<注>

- 1 1970 年代にニューヨークのブルックス地区に住むアフリカン・アメリカンの若者たちのブロック・パーティから生まれた文化。ヒップホップの基本要素である DJ、MC、ブレイクダンス、グラフィティは、日本やフランス、ドイツ、ガーナ、キューバ、インド、イギリスなど、世界中の若者文化の中に見出すことができる。
- 2 アメリカ合衆国で、南部奴隷制地域から北部自由州やカナダへ黒人奴隷を救出した奴隷制反対運動の秘密組織。
- 3 (Richard Wright) 1908-60. ミシシッピ州ナッチェス出身の作家。人種差別に対する抗議小説の最高傑作『アメリカの息子』で、黒人作家の代表的存在になった。また自然主義の伝統を継承するアメリカ作家として、名実ともに揺るがぬ地位を築いた。
- 4 (Ralph Ellison) 1914-1994. アメリカの作家。オクラホマ州オクラホマ・シティ生まれ。タスキーギー学院に進んで音楽の勉強をしたあと、ニューヨークに渡り、リチャード・ライトと知り合い、作家生活に入った。
- 5 (Amiri Baraka) 1934-2014. 前名リロイ・ジョーンズ。アメリカ合衆国ニュージャージー州ニューアーク生まれの詩人、作家、音楽評論家、思想家、活動家。
- 6 (KRS-One) 1965- . KRS-One は、“Knowledge Reigns Supreme Over Nearly Everyone”（「知識がほぼ全ての人々を完全に支配する」）の省略形。ニューヨーク市ブルックス生まれの MC、音楽プロデューサー。

- 7 (Thelonious Sphere Monk) 1917-1982. ノースカロライナ州ロッキーマウント生まれのピアニスト。正式な音楽教育は受けていないが、教会のオルガニストとして活躍し、後にジャズ・ピアニストとして有名になった。